

(3) 歴史環境

良好な内湾である博多湾を有する本市は、古くから海を通じた交流を軸として発展してきました。

ここでは、本市の歴史を原始～近現代までの大きく5つの時代区分で整理します。

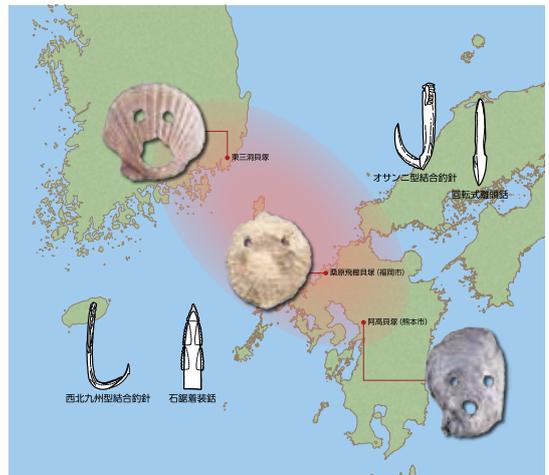
1) 原始

本市域に人が住みはじめたのは、旧石器時代の約3万年前と考えられています。当時、海面は現在より低く玄界灘には陸地が広がっており、海とは遠く離れた土地でした。縄文時代になって、気候の温暖化とともに次第に海面が上昇していき、玄界灘や博多湾が出現すると、人々は狩猟や採集に加え、魚介類を求めて積極的に海へ進出してきました。船の製作技術や航海術の向上によって、**中国大陸や朝鮮半島との活発な交流**が始まりました。

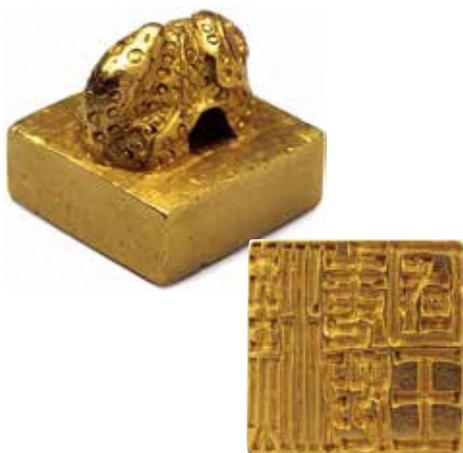
弥生時代、そのような交流を通して、**水稲耕作や金属器製作などの技術**が伝わりました。水稲耕作のために集落がつけられ、やがて、小さな村が統合されて広い地域を統括する国が生まれました。福岡平野では**奴国**、糸島平野では**伊都国**が大きな勢力を持ち、それぞれが**中国と直接交渉**を行い、**奴国王**は後漢の皇帝から**金印「漢委奴国王」**を与えられました。



約2万年前の陸地



朝鮮半島と九州から出土する貝面、漁具



国宝 金印「漢委奴国王」



金印の通った道

古墳時代、畿内を中心に大和政権が成立すると、各地に前方後円墳が築かれ、その影響はこの地にも及びました。海上交通を掌握したこの地の豪族たちは、大和政権が朝鮮半島南部の伽耶地域や百済と交渉・交易する際に、パイプ役として活躍していたと考えられます。古墳の内部に作られた横穴式石室は、朝鮮半島の影響を受けた新しい埋葬施設で、日本で最初にこの地に伝わりました。



鋤崎古墳の初期横穴式石室（模型）

column : 06

わがまちの文化財 ～金印と志賀島～

国宝 金印「漢委奴国王」

天明4（1784）年2月23日、志賀島で農作業中に偶然発見された金印。中国の歴史書『後漢書』に記された、後漢の光武帝が建武中元2（57）年に「倭奴国」の使者へ与えたという「印綬」であると考えられています。

金印は、一辺約2.3 cmの印面に「漢委奴国王」の五文字が刻まれ、つまみの部分は蛇がかたどってあります。印は、文書の機密性を保持するために「封泥」に捺印するためのものです。封泥とは、文書や荷の紐の結び目に封をするために使われた粘土です。

金印に関わる様々な論争は、現在も完全な決着をみたとはいえません。印文の読み方に加え、出土地の特定、志賀島で出土した理由、文字の彫り方、製作技法など、江戸時代から現在まで、あらゆる視点から研究が続いています。

金印を常設展示している福岡市博物館では、

顕微鏡調査や3D調査の成果を活用した展示コンテンツの製作、市内の製菓事業者の協力を得て実施した金印チョコレートづくり、封泥の体験イベントなど、金印をもっと楽しみながら知ってもらおうという取組を行っています。

また、志賀島は「金印出土の地」として広く市民に親しまれており、「志賀島金印まつり」や「福岡志賀島金印マラソン」などが毎年開催されています。



金印チョコレート

2) 古代

朝鮮半島内で政治情勢が不安定になると、大和政権は対外交渉と地方支配の拠点として、博多湾岸に「**那津官家**」や「**筑紫大宰**」を設置しました。齊明天皇6(660)年に百済が滅亡すると、大和政権は百済復興のために救援軍を送りましたが、天智天皇2(663)年の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れました。国防・政治体制の変革に迫られた大和政権は、筑紫大宰を福岡平野の奥に移し、周辺に水城・大野城・基肄城等の防衛施設を築き、能古島等の湾岸には防人を配置しました。

大宝元(701)年には九州全体の統括と外交・軍事を担う「大宰府」が設置されました。大宰府の附属機関として博多湾岸に設置された筑紫館は、外国からの使者の迎賓や、唐や新羅へ渡る使節の出発・帰国の場として機能しました。

平安時代に入り、この施設は唐の外交施設である鴻臚寺にならって「鴻臚館」の名称で呼ばれるようになりました。9世紀以降、遣唐使が派遣されなくなった頃には、唐や新羅の貿易商人たちとの交易の拠点へとその機能を変えていきました。



鴻臚館跡（復元図 CG）

3) 中世

11世紀後半に鴻臚館がその役割を終えると、宋の商人たちの交易の拠点は博多へと移り、鎌倉時代にかけて、民間主導の貿易が活発化しました。宋の商人たちの中には博多の町に定住する者もあり、「博多綱首」とも呼ばれました。博多の町には「唐物」と呼ばれる中国風の文物があふれてにぎわいました。



博多遺跡群出土の青磁碗

国際貿易都市としてにぎわっていた博多ですが、文永11(1274)年、元軍の襲来に見舞われ、博多の町や筥崎宮等が大きな被害を受けました。その後、鎌倉幕府は防衛のために博多湾沿岸一帯に石築地(元寇防塁)を築造しました。弘安4(1281)年に再び元が襲来しましたが、石築地の存在や悪天候等によって、上陸による被害を阻止することができました。さらなる襲来に備えて、博多湾岸は警備が強化され、九州の訴訟裁断・軍事を統括する鎮西探題が置かれました。

室町時代には、博多の商人によって日明貿易が主導され、明のほか朝鮮・琉球・東南アジアとの交易が行われました。そのため、地域権力にとって、博多を支配することは重要な課題でした。戦国時代には、大友、龍造寺、毛利など有力な戦国大名が博多をめぐって激しく争い、博多の町は焼打ちなどによって大きな被害を受けました。



石築地（元寇防塁）



博多湾沿岸に築かれた石築地

column : 07

ふくおか人物伝 ～謝国明と中世博多～

鎌倉時代、宋より日本に渡来し、博多を拠点に対外交易に従事する船頭兼貿易商人は博多綱首と呼ばれました。博多遺跡群より出土する当時の中国陶磁器には、「王」や「丁」、「林」や「李」といった中国人の姓を墨書したものが多く、多くの宋商人がこの時期博多に居住して貿易を営んでいた様子をうかがい知ることができます。博多綱首の代表として著名な謝国明もまた、そのような宋商人の一人です。

謝国明は南宋・臨安府（現 杭州市）の出身で、博多の櫛田神社の傍に居住したと伝えられます。博多綱首の中には宮崎宮や大宰府大山寺（宝満山）等の地方寺社に所属し、その保護を受けながら交易に従事した者もいたことが知られますが、謝国明も同様に宮崎宮・宗像社に帰属していました。仏教、特に当時南宋から日本へ流入しつつあった禅宗を信仰し、仁治3（1242）年には博多に承天寺を創建して、宋での修行を終えて帰国した円爾（聖一国師）を開山に招きました。また円爾の勧めにより、火災で焼失した南宋杭州の径山万寿寺に再建用の材木を寄進するなど、禅宗を通じた両国の文化的交流を経済的に支援しました。海上航行の要所にあたり、

当時宗像社の支配下にあった玄界灘の小呂島にも領地を得ていたことが知られています。

謝国明は13世紀半ばに没したと考えられますが、その大きな功績とあわせて、後世に至るまで博多の人々の記憶から消え去ることはありませんでした。博多駅前一丁目に聳えている「大楠様」と呼ばれるクスノキは、謝国明の墓石の傍らに植えられた木が成長したものだと伝えられ、現在でも承天寺や地域の人々によって祀られています。承天寺境内の開山堂には内陣正面に開山聖一国師、外陣右側に開基檀越の武士武藤資頼と並んで謝国明の木像が安置され、折々の法要が営まれています。



承天寺開山堂の謝国明像

4) 近世

天正15(1587)年に豊臣秀吉が九州平定を成し遂げた後、焼けた博多の町は太閤町割により再編が行われました。この時に現在の博多の市街地形成のベースが整備されました。朝鮮出兵の拠点として博多を重視していた秀吉は、博多商人の経済活動に保護を与え、これによって博多の町は再び活気を取り戻しました。

江戸時代には、関ヶ原の戦いの功績により筑前国を与えられた黒田長政が、博多の対岸の丘陵地に新たに福岡城と城下町を建設しました。那珂川を境にして、新しい城下町「武士の町・福岡」と中世に国際貿易都市として栄えた「商人の町・博多」が併立する「双子都市」が誕生しました。参勤交代制度や海運業の発展によって、陸・海の交通網が整備されました。唐津街道には箱崎・姪浜・今宿に、三瀬街道には金武・飯場に宿場が置かれました。この頃、港は10か所あり、唐泊・宮浦・今津・浜崎・残島(能古島)の廻船業者による筑前五ヶ浦廻船は大きな利益を上げていました。



博多旧図



福博惣図(福岡市博物館所蔵)

5) 近現代

明治時代になり、廃藩置県によって福岡県が発足したのち、明治22(1889)年に「福岡市」が誕生しました。発足時は人口約5万人・面積約5km²で、九州では鹿児島市、長崎市に次ぐ人口でした。明治32(1899)年の博多港開港や、明治36(1903)年の京都帝国大学福岡医科大学(のちの九州帝国大学医学部)の設置などを経て、明治43(1910)年に現在の天神地区で開催された第13回九州沖縄八県連合共進会を契機として市街地の整備が進みました。さらに、周辺町村との編入を繰り返し、本市は九州一の都市へと

発展しました。

第二次世界大戦中、昭和20(1945)年6月19日にはアメリカ軍による空襲で、市内の中心部は大きな被害を受けました。戦後は焼け野原からの復興を目指し、市街地は徐々にぎわいを取り戻していきました。主要道路や鉄道網の整備が進み、昭和30年代には人口が50万人を突破しました。また、第三次産業に特化した産業構造を構築してきたこと



福岡大空襲後の福岡市街（福岡市博物館所蔵）

が人口集中をもたらし、さらに、福岡空港の供用開始や山陽新幹線の全線開通によって陸・海・空の玄関が整備され、昭和50年代にはついに100万人を突破しました。

平成元(1989)年に開催されたアジア太平洋博覧会'89(よかトピア)を契機として、国際イベントの開催やアジアを意識した施設の充実により、福岡を訪れる外国人の数も大幅に増えています。近年では、クルーズ客船の寄港回数が国内最大になるなど、アジアの交流拠点都市として発展を続けています。



福岡市編入の過程

column : 08

都市発展の歴史 ～博覧会と都市の発展～

博覧会と市街地整備

明治時代以降の博覧会（共進会）は、当初は殖産興業の推進のための技術の見本市でした。明治時代終わりごろになると、博覧会はより一般の人々に開かれた見せ物的なものへと変化し、大規模化します。福岡市で開催された博覧会は、様々な面で市街地の形成に大きな影響を与えました。

中洲・天神の市街化

九州沖縄八県連合共進会は、九州・沖縄各県のすぐれた文物を展示するもので、福岡市では第5回（明治22年）と第13回（明治43年）の2度にわたり開催されました。

第5回の会場となった中洲は、江戸時代末に福岡藩の精錬所が置かれた場所でした。中洲は、共進会の終了後、福岡県立福岡測候所や福岡県立福岡工業学校が設置され、共進会で建てられた建物が福岡市会の議事堂として利用されるなど市街地化が進みました。

第13回は、^{いなば}因幡町（現 中央区天神一丁目）と福岡城の堀の一つである肥前堀を埋め立てて会場としました。旧福岡県公会堂貴賓館は、この共進会の貴賓を接待する施設として建設されました。共進会の跡地は、県庁や市役所、警察署が建ち並びました。県庁が移転した現在でも、天神地区の中心部となっています。また、博覧会の開催にあわせて路面電車の開通、博多駅舎の建替えといった市内交通の整備も行われました。



第13回九州沖縄八県連合共進会会場

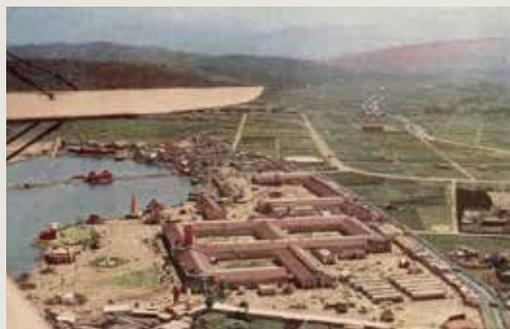
大濠公園の開園

昭和2（1927）年に福岡市主催で開催された東亜勸業博覧会では、福岡城跡の西側にあった大堀を埋め立てて会場としました。博覧会は60日間の会期で160万人以上が入場する盛況でした。博覧会の開催に合わせて路面電車の城南線が開通しました。博覧会終了後、会場とその周辺を整備して昭和5（1930）年に開園した^{おおほり}大濠公園は、市民の憩いの場となっています。

“シーサイドももち”の誕生

平成元（1989）年、福岡市制100年を記念してアジア太平洋博覧会'89（よかトピア）が開催されました。会場は、地行（中央区）と^{ももち}百道（早良区）の臨海部を埋め立てて造成された「シーサイドももち」地区でした。アジア・太平洋地域をはじめとする37の国と地域、国内の1,056企業・団体が参加した大規模な博覧会で、800万人以上の入場者を集めました。博覧会に合わせて建設された福岡タワーは、今日では福岡市のランドマークとして定着しています。また、よかトピアテーマ館は平成2（1990）年に福岡市博物館としてオープンしました。

博覧会閉幕後、「シーサイドももち」地区には、公園・緑地が整備され、集合住宅が建ち並びました。市立百道浜小学校、福岡市民防災センター、市総合図書館の他、福岡ドーム（現福岡ヤフオク！ドーム）や放送局などが建設され、「学び」「楽しみ」を提供するスポットとなっています。



東亜勸業博覧会本館と大堀